

第5回 援助者の諸活動

①アセスメント

○アセスメントの基本的考え方

援助の対象（子ども、学級、学校）についての情報収集、分析、意味づけを通して、今後の援助に関する意思決定のための資料を作成するプロセス

→ケースにまつわる情報を収集して整理し、それを統合して、そのケースの過去から現在、未来に至るまでの全体像、ストーリー、シナリオを頭の中で構成すること

○アセスメントと対応はセット：対応に有効な情報を手に入れることがアセスメントの役割

- ・1つの側面のアセスメントだけでは不十分である

病理的な側面のアセスメント：統合失調症→医療へつなぐ

その他の側面：同じ病理を抱えている子どもでも、年齢、状態像、保護者、友人関係、性格、学習状況、進学等の希望、服薬管理などの状況は異なる

○学校におけるアセスメントの特徴

学校は生活の場であることから、生活場面で得られる情報を柔軟に生かしたアセスメントが求められる。厳格なインタビュー面接や心理検査によるアセスメントだけが選択肢ではない。

○学校におけるアセスメントの軸

①リソースのアセスメント

- ・自助資源のアセスメント：例外探しをして、成功の責任追及をする
- ・援助資源のアセスメント：その子が感じるリソース探しとともに、個々の援助者の得意、不得意も探しておく。

②ニーズのアセスメント

- ・誰のニーズで相談が開始されているのか
：子ども自身の思いと、保護者や教師の思いがずれていることはないのだろうか
- ・語られないニーズのアセスメント
：本人が自覚できない、あるいは言語化できない思いを、身体化や行動化という方法で表現している場合、個別相談だけでは把握は不可能であり、生活の場を共有している保護者や教師との情報共有が不可欠

③発達状況のアセスメント

- ・情緒面、対人関係面、知的面等に関する発達に遅れや進みがないか、それが問題の発現に影響を与えていないかを検討する

④精神医学的視点のアセスメント

- ・精神障害に関する知識をもとに、生物学的な基盤をもち、精神科治療薬が奏功する疾患かどうかを検討する
- ・レッテル貼りではなく、対応のためにという視点を欠かさない
- ・リファーの際には、そこに様々な思いや問題があることに留意する

⑤チームメンバーのアセスメント

- ・チーム内守秘の考え方に基づいた情報共有は「基本的な前提」事項である
- ・メンバーの教育観やストレス耐性によって、取ることが可能な援助方法や、共有すべきアセスメント情報に柔軟な変更を加える必要がある

⑥学校環境のアセスメント

- ・学級環境がどのようになっているのか、その力動状態も含めて検討する
- ・学級や学校へのその子の思いも検討する
- ・学校や学級の行事や、学習などの年間の流れによっても問題の発現状況は異なる

○学校におけるアセスメントに特徴的な方法：「観察」によるポイント

- ・先生や友達の話をしている時の様子（姿勢、動作）→聴覚認知の仕方
（例）ボーっとしている、揺れている、すぐに注意がそれる
- ・板書を写している時の様子（目の動き、体の動き）→視覚認知の仕方
（例）黒板の字を見る時に必要以上に体が動く
- ・話している時の様子（言葉の使い方、表情、話の内容）
→コミュニケーションの特徴、社会性の特徴
（例）話のつじつまが合わない、友達と会話が成立しない
- ・道具を使用している時、体育等の運動をしている時、歩く時の様子（動作、タイミング）
→こわがりなどの心理的特性、不器用さ、身体イメージ
（例）よく人とぶつかる、笛が吹けない
- ・表情、まばたきの回数→感情の動き、ストレスの多さ
- ・姿勢→ストレスの状況
- ・子どもの作品
▽習字：筆圧、はねはらいの方向、空間構成
▽絵：人物などの描き方、空間構成
▽日記、ノート等：字の書き方、色の塗り方、線の強さ、余白の使い方、空間構成